

日英語比較三考

著者	大塚 巖, 川村 義治, 高瀬 孝子
雑誌名	教科教育研究 金沢大学教育学部
巻	24
ページ	167-180
発行年	1988-07-21
URL	http://hdl.handle.net/2297/23428

日 英 語 比 較 三 考

・大塚 巖 川村義治 高瀬孝子

Switching Back and Forth between English and Japanese

Iwao OTSUKA, Yoshiharu KAWAMURA, Takako TAKASE

I Declining eyesight を「視力の衰え」と訳すとよい場合について

名詞句、動詞句、形容詞句、副詞句には、句の範疇名を決定し、そして、句の生じる位置、呼応、下位範疇化制限、選択制限、等を決定する語、つまり、句の中核を成す語が必ず一つ含まれている。名詞句なら名詞、動詞句なら動詞、形容詞句なら形容詞、副詞句なら副詞である。そのような語を主要語 (head) と言い、もし、その主要語に付随して生じている要素があれば、それを修飾語 (modifier) と言う。一般的に、統語的には、主要語が句の中心的な働きをなしている、と言える。ところが、意味的に見ると、修飾語が逆に中心的な働きをしているのでないかと思われることがある。このことを、名詞句の場合について見てみたい。

以下に記してある(1)と(2)においては、主要語の名詞ではなく、修飾語の「of + 名詞」の名詞が意味の中心を成していると考えられる。また、統語的に見ても、名詞が文中の他の動詞や代名詞の数の一致に関与してくるという事実もある。

- (1) that kind of book (s) <ある種の本>
(books of that kind とも言う)
- (2) a large number of boys <多数の少年>
(Cf. the number of the boys <その少年たちの数>
lots of cars <多くの車>

two dollars' worth of candy <2ドル分のキャンディー>

- (3) three years of toil <3年の労苦>
six or seven hours of sleep <6, 7時間の睡眠>

(3)のような表現においても、of の後の名詞が意味的に中心であることが多いようである。実際の文に当たって、見てみたい。

- (4)
It cost him three years of toil to win
<彼はそれを得るのに3年の労苦を要した>

Getting six or seven hours of sleep a night is necessary for good health
<健康のために夜7, 8時間の睡眠を取ることを必要だ>

Since we broke our backs for all those years, we deserve four years of fun
<我々はあれだけの年月懸命に努力したんだから、4年間は楽しんでいいはずだ>

It was due to his skill obtained by long years of practice
<それは彼の長年の練習によって得た熟練のお陰であった>

It was the result of many years of careful study and research

<それは多年の綿密な調査・研究の結果であった>

このような「～ year (+of) +名詞」の多くの例を見ると、名詞に限定詞 (determiner) のないことにまず気が付く。このことは、上述の(1)と(2)においても、全く言い得ることである。(1)と(2)では、もし名詞に限定詞があれば非文法的となる。「～名詞+ of」が、言わば、ひとままとまりとなって、後の名詞を修飾していると見なされるのである。

(5)

- * that kind of a book
- * a large number of his books

もう一つ気の付くことは、動詞や前置詞（最後の 2 つの例）に直接結び付くのは、決して years や hours ではなく、of の後の名詞であるということである。たとえば、cost → toil, get → sleep, deserve → fun, by → practice, (the result) of → careful study and research, である。別の言い方をすれば、「～ year [hour] of +名詞」という表現の中の～ year [hour] of は、Milka Ivić (1962) の言う省略可能な (omissible: 省略しても文や語句の文法性に影響を与えない) 要素ということである。

(6)

- It cost him (much) toil to win
* It cost him three years to win

It was the result of careful study and research

- * It was the result of many years

ただ、前置詞 after の後では、以下の例に見られるように、after に結びつくのが years [a few weeks] なのか、それとも「行為」を表す名詞なのか、どちらとも考えられて、明確でない。a few weeks' のような属格が用いられるということは、やはり、名詞が句の意味的中心を成していると考えていいのではないか、と思われる。

(7)

After years of preparation, they went out on an expedition to the North Pole

<何年間もの準備の後、彼らは南極の探検に出かけた>

After a few weeks of training (After a few weeks' training), the young people readily slip into the habit of using the most complex new electronic equipment

<若い人達は、2, 3 週間訓練すれば、新しい極めて複雑な電子機器を用いる習慣をすぐに身につける>

「～ year + of +名詞」表現で、もし、of の後の名詞に限定詞が付いているならば、先の例とは逆に、意味の中心は主要語 year にあるようである。そして、この場合、動詞と直接結び付くのは、of の後の名詞ではなく、主要語の year である。つまり、最も一般的な解釈をすればいいのである。そのような例を以下に示す。

(8)

The employers do not want to hire those university graduates who may be regarded as having wasted four years of their youthful working life in the pursuit of a graduation diploma

<若さに満ちて働ける時期のうちの 4 年間で卒業証書を手にするために無駄に過ごしたと考えられるような大学卒業生を雇用主は雇いたいとは思わない>

He occupied the remaining years of his life in authorship

<彼は余生をもっぱら著述に費やした>

It has now reached the 30th year of its existence

<それは操業30年を迎えた>

The society has just closed the first year of its activities

<その協会は今その活動の第1年を終わった>

上記の例において、もし、～ years of を省略してみると、その後に残った名詞は、動詞とつながらず（つまり、動詞の選択制限を犯すことになり）、明白に非文法的となる場合がある。

(9)

- * It has now taught its existence
- * The society has just closed its activities

以上、「of + 名詞句」から成る前置詞句が後ろから名詞を修飾している「名詞+修飾語」という名詞句を扱ってきたが、形容詞や分詞が前から名詞を修飾している「修飾語+名詞」という名詞句でも修飾語が意味的に中心をなしている場合があるのではないかと、筆者はかなり以前から感じていたのであるが、2年程前 James Kirkup 氏の“Learning to Adapt”と題する短い随想を読んでいた時、そのわずか2ページの間に、そのように考えざるを得ない表現が何度も出てくるのに出会い、それまでぼんやりと抱いていた直感が裏付けされたような思いをしたことがあった。以下に Kirkup 氏の文章を引用して、この種の表現を逐一検討してみたい。「修飾語+名詞」のところをイタリック体にしてある。2番目の例だけは文字通り「修飾語→名詞」の順に解釈すべきであるが、他の6つの例は、それとは逆に修飾語に意味の中心を置くような読み方をすべきであると思われる。

(10)

If it is difficult for some people to learn to adapt to the new concepts of leisure and creative use of free time, it is even more difficult for others to adapt themselves to the ^①*rapidly changing conditions* of work in factories, offices, and schools.

There is a terrific increase in the use of computers, word processors and many other electronic devices. ... After a few weeks' training, they readily slip into the habit of using the most complex elec-

tronic equipment.

But older men and women are finding the ^②*increasing mechanization* of office work very hard to take. They have difficulty in mastering the technical know-how of these advanced machines. ... Even young people straight out of college begin to complain of various physical ailments after operating these electronic marvels for long periods: they suffer from ^③*declining eyesight* or *blurred vision* from having to keep their gaze fixed all the time on the computer screens, and they develop severe muscular pains in neck, shoulders and lower back. ...

Factory workers, too, are increasingly threatened by modern developments in robot technology. ... There are even robots that can recognize voice commands, colours, and numbers, so that they can grade and sort objects without mistake. And they never go on strike, or ask for ^④*higher wages* and *better living and working conditions*! The trend today is towards *increasing robotization*, and this trend will soon be regarded as quite normal — that is, it will become the tradition.

①の rapidly changing conditions は「・・・急速に変わりつつある労働条件に適応することは・・・」というより、「・・・労働条件の急速な変化に適応することは・・・」とした方が自然である。前者の日本語文でも分からないわけではないけれども、後者の方がより自然だと感じられるのは何故だろうか。それは、一つには、「～に適応する」の目的語は「急速な変化」であると考えられ、この目的語と動詞の「～に適応する」が、あいだに他の言葉を挟まず、直接的に連結されていて、ことばのつながりがよいかからだと思われる。英語の文の場合にも、adapt themselves to と the rapidly changing が連結されており、つながりがよくなっているのでは

る。もう一つには、前者の日本語を理解するためには、「急速に変わりつつある」という概念を「労働条件」まで持ち込んで、それを包むような形で、「～に適應する」に結びつけなければならないからである。今の場合、「労働条件」が比較的短いので、それほどには不都合はないかもしれないけれども、もし、たとえば、「・・・急速に変わりつつある工場や会社や学校の労働条件に適應することは・・・」というような日本語文であれば、「急速に変わりつつある」を「労働条件」まで保持して読まなくてはならず、このために不自然さが感じられるのである。この種のつながりの悪さからくる不自然さは学生が行う訳文とか不慣れた翻訳者の訳文によく見られるものである。

②の increasing mechanization は、上述した①とは異なって、英語の構造に合わせて「しかし、年配の人たちは男も女も共に、ますます高まる事務の機械化は受け入れることが非常に困難であると気づき始めている」として何の不自然さもない。目的語の「機械化」の後に動詞の「～を受け入れる」が直接しているからである。英語の文の場合、意味上の目的語である (increasing) mechanization は動詞の take に先行し、動詞とは離れているけれども、ことこの構文に関する限り、形容詞 hard の特質からして、動詞と目的語とを結び付けることは容易である。(Cf. This sort of thing is hard to take <こうしたことは受け入れがたい>)

③の declining eyesight と blurred eyesight に関しては、文字通りに「彼らは、終始コンピューターのスクリーンを凝視していなければならないために生じる衰える視力あるいはかすんだ目に悩むのである」としたなら、極めて不自然である。「視力に悩む」、「目に悩む」があり得ないからであろう。「・・・視力の衰えあるいは目のかすみに悩むのである」とすべきである。人に程度の差こそあれ必ず eyesight は持っており、vision は持っているのであるから、declining eyesight の意味の中心は declining であり、また、blurred vision の意味の中心は blurred である。Milka Ivić 流の言い方をすれば、declin-

ing と blurred が省略不可能 (non-omissible) な要素である。言葉のつながりをよくするためという理由、さらには、意味の中心をなす語を主要語の位置に置く日本語表現、という理由で、「視力の衰え」、「目のかすみ」と訳するのがよいのである。別の言い方をすれば、日本語としてはそうであるけれども、英語においては、the decline of eyesight, the blurring of vision も可能であるが、この英語の文の流れのなかでは、むしろ、declining eyesight, blurred vision が英語らしい言い回しである、ということになろう。

④の higher wages は「より高い賃金」ではなく「賃上げ(a raise in wages)」, better living and working conditions は「より良い生活・労働条件」ではなく「生活・労働条件の改善 (the betterment of living and working conditions)」と言うべきであろう。ちなみに、和英辞典で「賃上げを要求する」にどういう英語をあてているか見てみると、demand [ask for] higher wages [a raise in wages, a wage increase] とある。

higher, better のように、形容詞の比較級が意味の中心をなして、日本語では比較級を抽象名詞として訳出したほうがよいことがよくある。その例を3つ以下に示す。

(1)

Last April the [Japanese] government kicked off a campaign to restructure the economy with release of the Maekawa Report, a project prepared by 17 eminent Japanese. The slender canon warned that Japan must consume more and export less if it hopes to achieve *greater "international harmony"* with its partners. *Shorter work hours and longer vacations* were encouraged so that people would have more time to spend their money. (*Time*, April 13, 1987. p. 14)

Unless we assume such individual and moral responsibility for our own health, we will soon learn what a *cuel* and expensive

hoax we have worked uoin ourselves through our belief that *more money* spent on health care is the way to better health. (*The New York Times ; Weekly Review*)

⑤の The trend today is towards increasing robotization も「今日の傾向は増進するロボット化である」よりも「今日の傾向はロボット化の増進である」とすべきである。

ある英作文の練習問題として次のような日本語文を英訳せよというのがあった。そして、その解答例として(a)が載せられていた。

(12)

「あの教授の姪の春子さんは容姿に魅力がないところをものごしのよさで補っています。
(make up for を用いて)

- (a) Haruko, the professor's niece, makes up for the defects of her person by the sweetness of her manner.
(b) Haruko, the porfessor's niece, makes up for her unattractive figure by her graceful manner.

(a)では、日本語の構造にほぼ合わせて、「容姿に魅力がないところ」を the defects of her person とし、「ものごしのよさ」を the sweetness fo her manner としているのである。(b)は本稿でこれまで述べてきたことがらを考慮して筆者が英訳したものである。

また、『英語青年』61年7月号の「和文英訳練習」の課題として出された文章の中に本稿で問題にしてきた表現形式をもつ4都市化の猛烈なスピード」が出ていた。筆者は当時この部分を、the furiously speedy urbanization と訳してみた。2か月後の同誌には、解答例が3つ載せられていて、下に記してあるうちの(a)は担当者金子稔氏の訳文、(b)と(c)は投稿者の訳文であった。(b)の the incredibly fast urbanization が本稿で扱ってきた言い回しである。

(13)

「日本人はすっかり愛国心をなくしてしまっ

て、外国人からみるとただただ働いて權益にしがみつき、そのくせ自国に対するプライドが感じられない不思議な民族だそうだ。これは都市化の猛烈なスピードによるものと私は思っているが、その都市化の波は郷土愛をも根こそぎ日本人からとってしまうような勢いを持っている。…」

- (a) ... This is, to my mind, due to *the terrific speed with which Japanese society is being urbanized*.
(b) ... I think this is due to the *incredibly fast urbanization*, which
(c) ... I think this is because *the country has been urbanized so rapidly*;

以上、動詞とのつながりとか名詞の情動的価値の低さといった「文内部」の要因から名詞句の修飾語句が意味上重要な役割を果たす事例を考察してきたわけであるが、文を越えた、先行する「文脈」から修飾語が意味上中心と考えられることがある。

(14)

Since 1900, our average life expectancy has increased dramatically — from 47 to 72 years. But there has been a *relatively small gain* in longevity over the last decade, when health spending more than doubled and government spending for health quintupled.

<…しかし、この10年間にわたって寿命の比較的少ない伸びが~~あ~~た→この10年間の寿命の伸びは比較的少なかった>

「寿命の伸び (gain in longevity)」は前文の「我々の平均余命は劇的に伸びた (Our average life expectancy has increaed dramatically)」の中に既に言及されており、「比較的少ない」という統語的修飾語句が新しい情報となり、文の意味の中心を成している。したがって、矢印の右側の和文がより正しく英語の意味を伝えているのである。

以上は名詞を主要語とした「修飾語＋名詞」を扱ってきたが、動詞を主要語とする「動詞＋修飾語」でも修飾語が中心的な意味を担い、英語の構造に合わせてそのまま訳すと妙な和文になることがある。その例として、以下の引用文の最後の行にある *drinking moderately* を考えてみたい。健康上奨励すべき7つの習慣を順次述べたくだりである。

(15)

... the following health practices : getting seven or eight hours of sleep a night, eating breakfast, eating regularly and not between meals, keeping a normal weight in relation to height, refraining from smoking, exercising regularly and *drinking moderately*. (*The New York Times ; Weekly Review*)

<…喫煙を控えること、規則的に運動をすること、そして適度に酒を飲むこと→…喫煙を控えること、規則的に運動をすること、そして飲酒は適度であること>

この文脈で *drinking moderately* を「適度に酒を飲むこと」とすれば、飲酒を奨励することになりかねない。むしろ *being moderate in drinking* <酒に節度があること> という意味である。

[結び]

修飾語は本来、統語的には下位の status を持つものであるが、意味ないし情報構造の面では、むしろ上位の status を持つことがあり、英語を日本語に訳す場合にも、このことに考慮を払うことが望ましい旨を述べた。名詞句の他の表現形式にも、また動詞句などの他の句にも、このことは言い得ると思うので、今後さらにこの種の言語事象を収集し、検討を加えていきたいと考えている。 (文責 大塚 巖)

II 後置修飾と読みの問題

英語の読みの指導は、文からパラグラフ、談話や物語に至るまで、それぞれの構造に応じて的確な方法論に基づく必要がある。また、日本人がいかにか英語を読むか、言い換えれば、日本語から見た英語の構造が当然問題になってくる。

私たちが初めて英文を読むとき、まずとまどうのは、主語、動詞、目的語の語順の違いであろう。そして、長年学習して身についたと思えないのが、冠詞や前置詞の使用ではないだろうか。いずれも日本語にはないものである。

この小論では、日本語から見れば異質な、英文の後置修飾を取り上げる。一章では、言語類型学 (language typology) の立場から英語の構造を位置づける。二章では、後置修飾の例文を具体的に検討して、その仕組みと読みの問題を扱う。そして、効果的な読みの指導を考える材料にしたいと思う。

1 前置修飾言語と後置修飾言語

言語の構造を研究するのに、ふたつの方法論があるだろう。一つは、世界中からできるだけ多くの言語のデータを集めて比較、研究する方法であり、残りはある個別言語の構造を深く追究する方法である。前者は J. H. Greenberg の仕事とかかわり、後者は変形文法に代表される。

Greenberg (1966) は、言語類型学の先駆的な研究で、それによると、節 (clause) 内の主要な構成要素である、主語 (S)、動詞 (V)、目的語 (O) の順序は、論理的には SVO, SOV, VSO, VOS, OSV の6つの組み合わせが可能であるが、現実には世界の多くの言語はほぼ最初の3つの型に集約されるという。(最近の資料では、5番目までの言語が確認され、最後のタイプの発見も時間の問題であると言われている)

Greenberg は、このような節内の語順 (word order) に加えて、ある言語が前置詞 (Pr) をもつか、後置詞 (Po) をもつか、さらに名詞を修

飾する形容詞 (A) や属格 (G) が前置されるか、後置されるかという3つのパラメーターから言語類型学を確立した。その後、多くの研究がなされたが、B. Comrie (1981) は、言語の普遍的傾向から言語を次のふたつに分類している。

図 1

	語 順	前・後置詞	形容詞	属 格
(a)	VO	Pr	NG	NA
(b)	OV	Po	GN	AN

上の図式では、SVO言語とVSO言語は、語順を除いた他のパラメーターでは共通するので、VO言語として統一されている。これは、動詞 (V) と目的語 (O) の順序が、言語類型上決定的な役割をはたすことを示していると言える。すなわち、動詞と目的語の間には、強力な共起性、共存性があるので、修飾語句は互いの共存者の反対側に置かれることになる。例えば、VO言語では助動詞は動詞の左側へ、目的語の修飾語句 (形容詞、関係詞、属格など) は目的語の右側へ置かれて、VO間の緊密な関係が保たれる。他方、OV言語では、助動詞は動詞の右に置かれ、目的語は左から修飾される。

日本語は典型的なOV言語である。後置詞をもち、修飾語は前置される。では、英語はどうか。VO言語で前置詞をとるが、形容詞や属格の修飾は、AN, NA, GN (NP'), NG (of NP) の両方のタイプが可能である。それに対して、不定詞や前置語句、関係節等は後置修飾のみである。(図2参照)

以上の考察から、英語と日本語は言語類型上まったく異質な範ちゅうに属し、さらに英語の修飾形態が多用である点を考えると、生徒が英語の読解で混乱するのも納得できる。

図 2

前置修飾	後置修飾
形容詞	形容詞
属 格	属 格
分 詞	分 詞
	不定詞
	前置詞句
	同 格 節
	関係詞節

2 英語の後置修飾の具体例

(i) 形容詞

普通の形容詞は、名詞を修飾する限定用法 (attributive) と主語あるいは目的を説する補語となる叙述用法 (predicative) がある。形容詞は普通前置されるが、

図 3

用 法	例
predicative	This plan is practical
attributive	a practical plan
postpositive	something practical

後置 (post-positive) されるときもある。その場合、something practical が something which is practical という構造をもつと考えられるように、後置修飾は結局関係詞の問題に還元されるかもしれない。

これまで学校の授業では、後置修飾は -ing で終わる代名詞を修飾する場合や修飾語句を伴うときのみ後置されるというように、どちらかと言えば例外的に扱われてきた。しかし、言語類型学上の事実をふまえて、英語の後置修飾のあり方を見直す必要がある。例えば例1の any town famous for good wine をひとつの単位として読めない生徒がかなり目につく。これは、後置修飾を名詞句 (NP) のなかできちんと位置づけて教えないからだろう。

- (1) Do you know any town famous for good wine?
- (2) I like my coffee black
(コーヒーはブラックがいい)

後置修飾と関連して、例2のように、形式上は形容詞が後置されて後置修飾のように見えるが、目的語の補語である文も生徒には理解しづらい。この例は、I like [my coffee is black] と解釈させるとよくわかる。

(ii) 属格 (所有格)

- (3) my mother's portrait
- (4) a portrait of my mother

(5) this bad temper of his

属格は、GN (NP') と NG (of+NP) の2つのタイプがある。属格で苦労するのは、意味の問題である。(3)は「母がかいた肖像画」か「母をかいた肖像画」のふたとおりに解釈できるが、(4)は後者の意味のみである。

また、決定詞 (determiner) が並立できないという文法規則を教えれば、なぜ例5のような表現が有効かすぐ納得できる。なお、生徒には、名詞は修飾語句を前後にもって句を形成することがよくあり、前置修飾語句は決定詞から始まることを必ず理解させる必要がある。そうすれば、決定詞を手がかりにして名詞句を見つけだし、文を意味の単位に区切って読める。

(iii) 分詞

(6) a glass filled with water

分詞はAN, NAの両方が可能である。分詞で問題になるのは、過去分詞が後置された場合である。とりわけ、過去分詞が過去形と同一のとき、名詞、過去分詞を主語、動詞と読んでしまう生徒がいる。後置修飾の可能性を考慮して名詞句を大きくとらないからである。

(iv) 前置詞句

前置詞句の形容詞的用法は、統語上二つに分けて検討する。主語修飾の場合は、動詞の前の名詞句は主語であるとあらかじめ教えてあげれば、動詞を探させて文を動詞を中心にNP←V→NPと三分して主語をつかまさせさせる。そうすれば、前置詞句の後置修飾がよくわかる。(寺島隆吉 (1986))

(7) The Kon-Tiki carried food for four months

目的語の修飾は、形式上副詞句との区別がむずかしいようだ。(8)はコンチキ号漂流記の一文だが、「コンチキ号は4ヶ月分の食料を運んだ」

を、大部分の生徒はコンチキ号は4ヶ月間食料を運んだ、と解釈した。

(v) 不定詞、同格節

形容詞的用法の不定詞は、よく目的などを表す副詞句と見間違えられる。いったん形容詞的用法を覚えると、今度は名詞+不定詞をすべてそう解釈する生徒がでてくる。いずれにせよ、統語形式からだけで判断するには限界がある。

(8) I have no chance to go abroad

名詞のなかには、不定詞の後置修飾をとりやすいものがある。chance, plan, need, power等がそうである。これらの名詞を修飾する不定詞は、(8)のように、名詞の意味を説明する内容になっている。同じことは、thatの同格節にもあてはまる。fact, idea, belief, remark, opinion等の抽象的で総合的な性格の名詞が後置修飾のthat節をとる。

この一般(抽象)から特殊(具体)への意味の流れをひっくりかえらないで、いかに左から右へ読んでいくかが、後置修飾を読むときのポイントとなる。

(9) the fact that he wrote a letter to her
事実 [どんな事実かと言えば] 彼女が彼女に手紙を出した [事実]

(vi) 関係詞

(10) He has a son, who is a doctor
[He has a son]+[the son is a doctor]
彼には息子がひとりいる。その息子は医者です。(11) He has a son who is a doctor
He has+ ([a son]+[the son is a doctor])
彼には [息子どんな息子かと言えば] 医者の息子がひとりいます

(10)は非制限用法、(11)は制限用法の文である。

(10)では、彼には息子がひとりしかいないが、(11)ではほかに息子がいる可能性がある。書き手と読み手の関係から情報構造の違いを見てみよう。

(10)では、He has a son は独立した節で、書き手と読み手の間で了解、共有される情報である。だから、次に続く関係詞節の前提となる。それで、関係詞 who は the boy と解釈されるから、この定冠詞は前方照応 (anaphora) で、読み手は左から右へすんなり読んでいけるわけである。

他方後置修飾である制限用法では、読み手は関係詞節の情報を得てはじめて全体の主述関係が判断、断定できる構造になっている。

- (12) The car which he bought is a Toyota
The car [which he bought] is a Toyota
車 [どの車かと言えば] 彼が買ったのはトヨタ車です

(12)の定冠詞は、car ではなく car which he bought 全体に付くので、後方照応 (cataphora) である。読み手は car which he bought 全体を読まないで、car の内容を認定できない。この判断の保留、延期が後置修飾の核心であり、これを一般から特殊の意味の流れのなかでどう読んでいくかが読みの問題となる。

(文責 川村義治)

参考文献

- Greenberg, J. H. 1966 "Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements"
Comrie, B. 1981 *Language Unirersals and Linguistic Typology*
寺島隆吉 1986『英語にとって学力とは何か』三友社

III 日英語の否定疑問文に対する答え方の違い

はじめに

国際化社会と言われる今日の社会において、外国語、特に英語を習得する必要性は非常に強いと思われる。テクノロジーの分野に関する限り、用語の意味等は、かなりな程度各国共通であると言える。しかし、そのテクノロジーを駆使する人間の思考や感情は、その人々が持つ文化によって異なっている。

テクノロジーの分野で世界のトップレベルに立った現在の日本では、「国際化」のかけ声の下で英語学習が盛んであるが、単なる技術としての英語習得では国際化は望むべくもない。真の異文化理解なくして、真の国際化があり得ないことは、誰れもが容易に理解し得るところである。

技術としての外国語の学習という観点からみれば、外国語学習は、一つのコードから別のコードへの変換ということになるであろう。しかし実際は、ある言語の表現が、別の言語の中に相当する表現を持たないことがしばしばある。それは文化の違いに由来するものであって、単語、句、節、と置き換えを積み重ねることによって、文の意味が置き換わることには必ずしもならないのである。

本稿では、日本の文化と、英国、米国等の英語を話す国の文化の違いを、言語表現の分析を通じて明らかにしようと試みている。特に、日本人は、同じ文化を共有し、全て日本人は同じように考えると信じている傾向があり、そのため自分たちと違っている人あるいは違って見える人を特別視し、排除しがちである。文化や思考様式の違いをより深く理解することで、私達は異なる文化や思考様式を持つ人々を真に理解でき友好関係を持つことができるのである。

具体的に本稿では、日英両語の否定疑問文に対する応答の分析を行っている。一般的に英語の yes は日本語の「はい」に、no は「いいえ」に対応すると考えられているが、否定疑問文に

対する応答では、その対応関係は逆転する。これを説明するためには、日本語話者と英語話者との無意識の発想の違いにまで分析がなされないならば、日本語を母語とする英語学習者は、混乱をきたしてしまうであろう。

英語の yes/no, 日本語のはい/いいえの選択は、何を基準としてなされるかの分析を通じて英語と日本語との発想の違いが明らかにされるが、それによって、より深い英語理解、より深い英語話者の思考の理解を願うものである。

1 応答の原理

英語の場合

(1 E)

A : Did Taro go to school yesterday ?

B : Yes, he did.

No, he didn't.

(2 E)

A : Didn't Taro go to school yesterday ?

B : Yes, he did.

No, he didn't.

表1

	先行命題(A)	yes/no	後続命題(B)
肯定疑問 (1 E)	+	yes no	+
否定疑問 (2 E)	-	yes no	+

+ : 肯定命題

- : 否定命題

日本語の場合

(1 J)

A : 太郎はきのう学校へ行ったのか。

B : はい、行きましたよ。

いいえ、行きませんでしたよ。

(2 J)

A : 太郎はきのう学校へ行かなかったのか。

B : はい、行きませんでしたよ。

いいえ、行きましたよ。

表2

	先行命題(A)	はい/いいえ	後続命題(B)
肯定疑問 (1 J)	+	はい いいえ	+
否定疑問 (2 J)	-	はい いいえ	-

1 E, 2 E, 1 J, 2 J, 全ての例文で、Aは太郎が昨日学校へ行ったかどうかをBに尋ねている。表1で解るように、yesの後は必ず肯定+でありnoの後は必ず否定-である。ところが表2を見ると、はいの後は、肯定疑問に対する場合は肯定命題+であるが、否定疑問に対する場合は否定命題-となっている。同様にいいえの後は、肯定疑問に対しては否定命題-であるが、否定疑問に対しては肯定命題+である。

このことは、言語事象上の知識として教えただけでは、学習者は無意識の日本語思考様式に影響され、特に実際の聞く、話すという場面でお互いに誤解や混乱を引き起こしがちである。

また表1, 2の図式は、質問とその応答のみあてはまるわけではなく、誰れかの言った陳述に対して同意や反論を表す場合やあいずちのうちかたなどにもあてはまる。後続命題(B)の符号が先行命題(A)の符号と一致すれば同意であり一致しなければ反論となる。

ただし、日本語では、陳述に対する応答として、「はい」「いいえ」を使用することは稀れで、同意の際は「そうですね」に類する表現がなされるように思われる。反論の場合は、その場の状況に応じて様々な表現がとられる。

なお、英語日本語双方において、ここで述べた応答の原理に従わないように見える、yes/no及びはい/いいえの使用例があるが、それらについては、次章で考察したい。

陳述に対する応答例

- (5) 'What's the matter, Francis?'
his wife asked him.
'Nothing,' Macomber said.
'Yes, there is,' she said.
'What are you upset about?'
— Hemingway, *Winner Take Nothing*
"The Short Happy Life of Francis
Macomber"
- (6) 'It's not the same.'
'No, it is not,'
agreed the waiter with a wife.
— Op. cit., "A Clean, Well-Lighted Place"

2 例外的な応答

- (i)
「太郎はきのう学校へ行ったんじゃないのか。」という疑問文は、「……ないのか」と疑問の中に否定が含まれているので確かに否定疑問であると考えられるが、対する応答は：

はい、行きましたよ。
いいえ、行きませんでしたよ。

となり、(1 J)の応答と同じ答え方をする。

この現象に関して、久野(1973)は、質問者の意向という観点から、質問が構文上否定形になっているか否かではなく質問者が肯定形の答えを予期しているか否かによって「はい」と「いいえ」の使い方が違ってくると説明している。

中右(1984)は、文の意味構造の観点から、文を命題内容部分[太郎はきのう学校へ行った]とモダリティ部分[んじゃないのか]とに分けて、この疑問文の命題は肯定+であるので(1 J)「太郎はきのう学校へいったのか。」と同じ応答をすることに何ら矛盾はない、と説明する。モダリティ(法性)とは、願望・命令・謙遜など発話時の話者の種々の心的態度を、一定の統語構造によって表現することである。

同様に、日本語では「思いませんか」のような表現を含む質問に対しては、「思いますか」という質問と同じ応答をする。

- (7 E) 'She *doesn't* look very amiable,' he replied.
'No, but *don't* you think she's a fine woman?' she said, in a deep tone.
'Yes — in stature. ...'

— D. H. Lawrence, *Sons and Lovers*

- (7 J) 「あまり愛想はよくないね」と、彼は答えた。「そうね、でもすばらしい人だと思わない?」彼女は低く太い声で言った。「そう — 体格はね。...」

小野寺健訳(1973) 筑摩書房

「…思いませんか」という質問は、相手に自分の考えに対する同意を求めるものであると解釈することもできるであろう。また、(7 J)の例では、命題部分は[すばらしい人だ]でありモダリティ部分は[と思わない]である。

例(7 E)で、'No'は'No, she doesn't look very amiable.'の意味で、前言に対する同意を表している。'Yes'は'Yes, I think so.'でやはり同意である。双方とも(7 J)では、「そうね」「そう」となっており、前章で述べた「そうですね」に類する表現となっている。

- (ii)
第一章で述べた英語の応答原理にあてはまらない yes/no の用例を、中野(1982)は2例、内田(1987)は5例ほどあげている。

中野は、相手の推測を肯定するものとしての'Yes'や頷きをあげているが、説明はあまり説得的であるとは言えない。頷きの例は、非言語的伝達の観点からも分析がなされねばならないものと思われる。

内田は、相手の発話行為に対応する yes/no であると分析しているが、この解釈のほうははるかに説得的であると思われる。例(8)の'No'は「陳謝」という前言の発話行為に対応しており、例(9)の'Yes'は、否定要素を含む「忠告」ないしは「命令」の是認を示していると彼は説明している。

- (8) 'I'm sorry,' I said.

My voice was hoarse. 'I shouldn't have put my hand on you.'

'No,' she said. Her face was serious.

'That's all right. ...'

— Parker, *Love and Glory*

(9) 'Don't stop working.'

'Yes, sir.'

— Archer, *shall We Tell the President?*

ただし、この発話行為対応の用法は、普通の命題対応用法と平行して出てくるため、会話体の英文を読む際には、文脈等に注意して読む必要があると私には思われる。例えば次の例は、命題対応用法である。

(10) 'Don't neglect to insert the brandy, James,' the first client said.

'No, sir,' said the barman. 'Trust me.'

— Hemingway, *Op. cit.*, "The Sea Change"

(11) 'Don't do it, Paco.'

'Yes, said Paco. 'I'm not afraid.'

— *Op. cit.*, "The Capital of the World"

例(10)の'No'は'No, I don't neglect to insert the brandy.'の意味であり、例(11)の'Yes'は'Yes, I will do it.'という意味である。

3 yes/no, はい/いいえ選択の基準

yes/no 及びはい/いいえは何を基準として選択されるのかに関して、最も理論的かつ洞察的に整理したのは中右(1985)である。それは次のようにまとめられる。

英語の質疑応答の基準は、肯定命題でも否定命題でもなく、中立命題である。

(1 E) (2 E) の中立命題は：

Taro went to school yesterday.

日本語の質疑応答の基準は、肯定命題か否定命題かを問わず、全体命題である。

中立命題とは、肯定や否定という極性を持たない命題であり、無標の場合は肯定命題と等しくなる。(1 E)の質問は肯定命題からできており(2 E)は否定命題からできている。しかし応答はどちらの場合も、中立命題(= Taro went to school yesterday.)を基準として、yes/no が選択されるのである。yesは中立命題を肯定しているのであり、noは同じ中立命題を否定している。

日本語の場合、(1 J)の質問の全体命題は、「太郎はきのう学校へ行った。」という肯定命題からできており、(2 J)の質問の全体命題は「太郎はきのう学校へ行かなかった。」という否定命題からできている。「はい」は相手の質問の全体命題を肯定し、「いいえ」は否定をしている。例えば(2 J)の質問に対して「はい」と答えれば、太郎は前日学校へ行かなかったのであり、「いいえ」と答えれば、彼は前日学校へ行ったのである。

英語の(1 E)(2 E)に加えて、さらに次のような質問を考えてみよう。

(3 E) Taro went to school yesterday, didn't he? (肯定命題)

(4 E) Taro didn't go to school yesterday, did he? (否定命題)

英語の場合(1 E)(2 E)(3 E)(4 E)とどのような質問をされても、応答は、中立命題(= Taro went to school yesterday.)が事実と合致すれば yes が選択され、合致しなければ no が選択される。

同様に日本語の(1 J)(2 J)に加えて、次の(3 J)(4 J)を考えてみると、

(3 J) 太郎はきのう学校へ行ったんじゃないのか。(肯定命題)

はい、行きましたよ。

いいえ、行きませんでしたよ。

(4 J) 太郎はきのう学校へ行かなかったんだらう。(否定命題)

はい、行きませんでしたよ。

いいえ、行きましたよ。

日本語の場合、はい／いいえの選択は、質問者が肯定命題で尋ねているのか否定命題で尋ねているのかを考慮し、質問者の全体命題と事実とが合致していれば「はい」が選択され、合致していなければ「いいえ」が選択される。それ故(2J)(4J)では、質問の全体命題が否定命題であるので「はい」の後に「行きませんでしたよ。」と否定命題の文が続き、「いいえ」の後に「行きましたよ。」と肯定命題が続くのである。

4 結 論

前章で吟味したように、英語の yes/no の選択は質問の仕方(肯定命題で尋ねているのか否定命題で尋ねているのか)には何ら関係しない。英語の応答者は、質問の形式にはとらわれず、中立命題を直接事実とてらしあわせて yes/no の選択を行う。ただし、ここで注意しなければならないのは英語話者が必ずしも中立命題を意識しているとは限らないのではないかという事である。中立命題の設定は無意識のうちになされているのであろうと私には思われる。意識的レベルでは、応答者は単に自分の返事が肯定文なら(事実が肯定であるなら) yes を、否定ならば no を選択しているのである。

このことは、ラテン語やギリシャ語などの古代印欧語においては、yes や no のような断定的な返事のことばはあまり発達しておらず、質問に使われた動詞を繰り返して答えるのが普通であった事を思いおこすなら、より納得できるかたちで理解できるのではないかと考えられる。

英語の応答は、無意識にせよ会話している相手の質問を超えた中立命題というものを設定して、応答者が直接中立命題と関わるのである。つまり応答者(主体)は中立命題(客体)と直接的に対峙するのである。

日本語の場合、応答者は返事が質問の全体命題と合致するかしないかによって「はい」「いいえ」の選択を行う。会話している相手の質問の

全体命題と自分の応答とが一致するかしないかが重要なのである。日本人は中立命題を想定することなど無く、客観的事実と直接的に対峙することも無い。つまり人間関係が、応答者と客観的事実との関係を凌駕していると言えるであろう。日本人の思考様式では主体と客体とは直接的には対峙せず、緊張関係は英語話者の思考様式におけるほど強くはないと言える。

ここで結論として言いたいのは、英語の思考においては主体と客体とがはっきりと区別され互いに対立関係にあるが、日本語の思考においては主体と客体との区別が比較的曖昧であり、対立関係は英語ほど強くはないということである。

このような図式をうちたてて、その観点から英語と日本語の違い、日本人と英米人等英語を話す人々との様々な違いにあてはめて考えると、かなりな程度納得的に理解できる場合が多い。例えば、日本語においてしばしば主語が省略される事について、外山(1973)は「日本語の伝達が主体と客体、われとなんじの関係を明確に規定する必要のない間柄において行われてきたことが多かったことを暗示している。」と述べている。

さらに考えを深めてみると、英語応答者が無意識に想定している中立命題の概念こそが、日本人には欠落していると言われている絶対あるいは普遍の概念に通じるものであると思われるのである。個人(主体)と絶対的の神(客体)との対峙、普遍的真理の重さなど西欧人の思考の特徴であるとされている事柄などもこの観点から容易に理解することができるようになる。

(文責 高瀬孝子)

参 考 文 献

- 久野 暉 1973『日本文法研究』大修館
 中右 実 1984「質疑応答の発想と論理」
 『日本語学』4月号 明治書院
 中右 実 1985「意味論の原理(11)」『英語青年』2月号 研究社
 中野 道雄 1982「発想と表現の比較」『日英

語比較講座4』大修館

内田 聖二 1987「2つの yes/no」『英語青年』9月号 研究社

外山 滋比古 1973『日本語の論理』中央公論社